原　著

保育者養成課程における援助観の縦断的調査

笠　修彰*　命婦　恭子*　阿南　寿美子*　篠木　賢一*　末嵜　雅美*

＜要　旨＞

保育者養成課程において専門職としての援助観を育成することは、学生が保育者に必要とされる資質を高めるために重要である。本研究は、短期大学の保育者養成課程に在籍する２年間を通して行われる実習前後の援助規範意識を測定し、専門教育や学外実習が援助観の育成にどのように影響しているかを検討したものである。短期大学保育科に 2016 年度、2017 年度、2018 年度に入学した学生に対し、対象学生が在籍している２年間に４回の質問紙調査を実施し、援助規範意識を測定した。その結果、調査対象者を入学時の援助規範意識の特性で２群に分けることができた。実習前後に援助規範意識が安定している群と変化する群が見出された。また、変化する群は安定している群に比べ、入学時の返済規範意識、自己犠牲規範意識、弱者救済規範意識は高く、交換規範意識は低いということが特徴的であった。さらに、変化する群は、２年間の養成課程で専門職としての援助規範を学び、実習を経験することで、安定している群の援助規範意識に近づく傾向が示された。

キーワード：保育者養成課程、保育者の資質、援助観、援助規範意識、縦断的調査

Ⅰ．はじめに

筆者らは、これまでに、保育者に必要とされる資質が保育者養成課程で育成され変容する様子について客観的指標を用いて把握することを目的に、３年間の縦断研究を行ってきた[1)]。今回は、保育者に必要とされる資質のなかでも援助観に注目し検討を行う。

保育者にとって子どもの健全で健やかな成長を促し見守る実践は、職務そのものといっても過言ではない。その実践を支えるものとして、専門的な「知識」と「技術」は不可欠なものといえよう。しかし、保育者が行う援助は対人援助であり、そこには援助を必要とする子どもや保護者などが存在する。個別の人格や独自の課題をもった子どもや保護者は、一人ひとりが独自の生活を営み、社会とのかかわりを持っているため、かれらに援助を行う上で、知識や技術を画一的に用いることは困難である[2)]。厚生労働省による『保育所保育指針解説書』[3)] では、保育士に求められる主要かつ専門的な６つの知識と技術を掲げ、それらを状況に応じた判断のもと、適切かつ柔軟に用いながら、子どもの保育と保護者への支援を行うことが求められている。また、茂井・若尾[4)] は、保育者の援助について、「援助を必要とする相手を前にして､「手助けをする」のか「見守る」のか、あるいは何を手助けするのかなど、一人ひとりの状態や取り巻く環境を知った上で何が求められているのかを理解していなければ適切な援助になり得ない」と述べている。すなわち、保育者の援助は、それを必要とする子どもや保護者の個性を理解し、個別の状況を把握したうえで、専門職として、かれらにとって適切な援助を判断し、それを提供するために必要な援助方法を選択することが求められるのである。

箱井・高木[5)] は、「我々は、援助を必要とする場面に遭遇した時、援助に関係する規範の影響を受けて愛他的に行動する」と述べ、一人ひとりが「このような規範を社会化の過程で学習し、各自の経験を通じて自分なりに修正し、自分の行動基準として内在化」されている意識として「援助規範意識」を提示している。「援助規範意識」は、以下の４つの要素によって成り立っており、各自に社会化の過程を

＊西南女学院大学短期大学部保育科

通じて形成されていく[5]。1つめは、以前援助してくれた人には、親切にすべきで、傷つけてはいけないという互酬的な規範意識と、人に迷惑をかけたときにはその人に償うべきであるという補償的な規範意識を含んでいる「返済規範意識」、2つめは他者を助けるためには多少の自己犠牲も厭わないというような意識に関する「自己犠牲規範意識」、3つめは、自分より弱い立場の人や困っている人は助けなければいけないという思いや自分が持っているものを分け与えることに関連する「弱者救済規範意識」、4つめは、援助に見返りを期待し、自分に有利になるような援助なら行うべきであるという意識から構成されている「交換規範意識」である。これらの援助規範は、いずれも愛他的な行動に繋がるものであり、規範が高ければ他者への援助行動が増えるものである。その一方で、対人援助職の専門性を考えると、他者に援助したからと見返りを求めることや、助けたいという思いから自己犠牲してまで援助しようとすることは望ましくない[4]。すなわち、対人援助職である保育者には、専門職として適切な援助規範意識を有することが求められる。専門職としての規範意識を育成する保育者養成科目として「保育者論」や「社会福祉」などが挙げられる。

それと同時に、保育者養成のカリキュラムに組み込まれている教育実習、保育実習などの学外での実習は、保育者を目指す学生にとって社会化の過程の一つと捉えることができる。子どもや保護者と関わり、現場の保育者から指導を受けながら適切な援助の方法やありようを学ぶそれらの実習は、学生が専門職としての援助規範意識を培う過程で少なからぬ影響を与えると考えられる。

実習経験と援助規範意識の変化を調査した先行研究をみると、茂井・若尾[4]は、保育学生の「保育実習Ⅰ（施設）」の前後における援助規範意識の変化を側定し、実習前後で返済規範意識の減少が認められたことを明らかにしている。加えて、障害児施設で実習をした学生は自己犠牲規範意識が減少したこと、障害者施設で実習した学生は返済規範意識が減少したこと、児童養護施設で実習した学生は援助規範意識に変化がみられなかったことを明らかにし、援助対象の援助ニーズの違いによって援助規範意識の変化が異なることも示唆した。他方、大西ら[6]が精神保健福祉援助実習に参加した学生に対して行った調査では、実習前後における援助規範意識に変化は認められていない。また、柴田ら[7]が看護学生を対象に行った調査でも、大西らと同様、援助規範意識の変化は認められていない。これらの先行研究の調査対象者は、茂井らは保育学生、大西らは福祉系学生、柴田らは看護学生と専門分野の違いがあり、実習先で出会う支援対象者にも違いがあるが、学年はいずれも3年生あるいは4年生であり、一定の専門職養成教育を受けていることは共通している。荒木・通山[8]は、福祉専門職を目指す学生へのインタビュー調査によって明らかになった結果から、現場体験を通して獲得される視点と学生がこれまで培ってきた対人援助に関わる知識や福祉専門職に対する動機づけなどとの関連に言及しながら、学生の対人援助観の形成を促すためには実習前後の教育的支援が必要であるとしている。すなわち、援助規範意識は単に実習経験のみで変化するではなく、実習前後における養成者側の教育的な働きかけを含めたプロセスを通じて意識化していくことによって変化が促されるのではないかと考える。本学では短期大学部の2年間の保育者養成課程で必要とされる実習について細かく期間を区切って実施している。したがって、学生の援助規範意識の変化について、保育者養成課程の在籍期間を通して測定し可視化することは、質の高い実習指導や教育的支援の方法を検討するうえで重要なものだと考えるが、これまでそのことについて分析した研究はみられない。

そこで、本研究では、短期大学に在籍する2年間を通して行われる実習の前後における援助規範意識を測定し、保育科の養成課程を通して援助観の育成に専門教育や学外実習がどのように影響しているのか検討する。

Ⅱ．対象及び方法

1．対象者

調査対象者は、短期大学保育科に2016年度、2017年度、2018年度入学した学生、計266名。それぞれの調査時点の回答者数は、1回目247名（回答率92.9%）、2回目254名(95.5%)、3回目200名(75.2%)、4回目218名(82.0%)。欠損値は分析ごとに除外する。

2．調査手続きと倫理的配慮

調査時期は、2016年5月～2019年12月で、対象学生が在籍している2年間に4回の質問紙調査を行った。1回目は、入学後に学外での実習を経験する前の5月下旬から6月上旬、2回目は見学実習の

み経験した１年生の９月、３回目は１週間の幼稚園実習と２週間の保育所実習を経験した２年生の５月、４回目は全ての学外実習が終了した２年生の 12 月に実施した。実習指導に関する授業終了後に、研究者が回答は任意であることを説明して質問紙を配布、回答に同意した者のみがその場で記入し、回収した。

調査対象者には、調査内容と結果が授業の評価とは関連がなく、回答への参加の可否により不利益を被ることはないことが文章と口頭で伝えられた。なお、本研究は西南女学院大学倫理委員会の審査（2016 年度第４号、2018 年度変更）による承認を得て実施している。

３．測定尺度及び分析方法

援助観の測定には、一般成人の援助規範意識について測定する援助規範尺度を用いる。援助規範意識尺度は、23 項目に対して「ほとんどそうは思わない(1)」から「非常にそう思う（5)」までの５件法で回答を求める。得点範囲は 23 点から 75 点。返済規範意識（7 項目)、自己犠牲規範意識（7 項目)、弱者救済規範意識（5 項目)、交換規範意識（4 項目）の４サブスケールからなっている。サブスケールの項目数が違うため、分析では、サブスケールの得点を項目数で割ったものを用いる。

Ⅲ．結果

１．先行研究との比較

本研究の対象者の特徴を明らかにするために、先行研究に示されている平均値をもちいて、１回目の調査で得られた平均値とのｔ検定を行った。データを参照した先行研究は、看護学生を対象とした調査であり、実習前に測定された数値を採用した[7)]。返済規範意識（$t(127.33) = 3.68, p < .01$）と弱者救済規範意識（$t(177.82) = 3.75, p < .01$）では、先行研究よりも有意に高かった。自己犠牲規範意識と交換規範意識では、有意な差はみられなかった。

２．入学時の援助規範意識をもちいた群分けと群ごとのその後の変化

入学時の援助規範意識の特徴とその後の援助規範意識の変化を検討するために、１回目の４サブスケールの得点をもちいて階層的クラスタ分析（ユークリッド距離の平方，Ward 法）を行い、デンドログラムと解釈可能性を考慮した上で２クラスタを採用した。２クラスタの記述統計量を図１に示した。

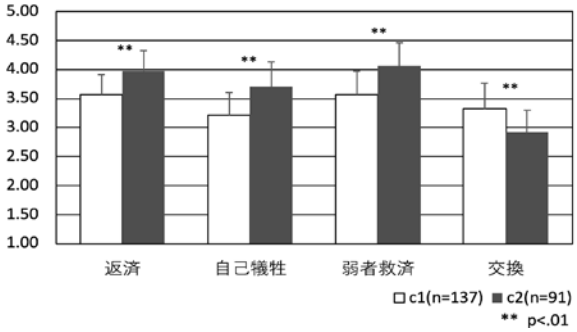

図１．２クラスタの記述統計量

第１クラスタ（以下ｃ１）は第２クラスタ（ｃ２）と比較して、返済規範意識（$t(226) = 8.57, p < .01$）と自己犠牲規範意識（$t(226) = 9.01, p < .01$)、弱者救済規範意識（$t(226) = 9.06, p < .01$）が低く、交換規範意識（$t(226) = 7.24, p < .01$）は高かった。一方で、c1 と先行研究を比較したところ、弱者救済規範意識（$t(117.52) = 4.51, p < .01$）のみが先行研究より低いという結果であり、必ずしも規範意識が低い群とはいえなかった。

２つのクラスタの、その後の援助規範意識の変化を比較するために分散分析を行った結果、返済規範意識（$F(3,411) = 6.02, p < .01$)、自己犠牲規範意識（$F(3,417) = 6.38, p < .01$)、弱者救済規範意識（$F(3,417) = 7.72, p < .01$)、交換規範意識（$F(3,420) = 3.78, p < .05$）のそれぞれで、交互作用がみられた（図２-１～４)。

単純主効果検定を行ったところ、返済規範意識では、c1 と c2 で時間の主効果が有意であった。多重比較を行った結果、c1 では、１回目より３回目のほうが有意に低く、c2 では、１回目が他の回よりも高く、２回目は３回目より有意に高く、３回目と４回目には有意な差はなかった。１回目、２回目、３回目、４回目の全てで c2 のほうが有意に高かった。

自己犠牲規範意識では、c2 で時間の主効果がみられ、c1 ではみられなかった。多重比較の結果、１回目より３回目と４回目のほうが有意に低かった。群間差は、１回目、２回目、３回目、４回目の全てで c2 のほうが有意に高かった。

弱者救済規範意識は、c2 で時間の主効果がみられ、c1 ではみられなかった。多重比較の結果、１回目が他の回より有意に高く、２回目は３回目より有意に高かった。群間差は、１回目、２回目、３回目、４回目の全てでみられ c2 のほうが有意に高かった。

交換規範意識では、c2 で時間の主効果がみられ、

c1ではみられなかった。多重比較の結果、1回目より4回目のほうが有意に高かった。1回目と2回目で群の主効果が有意で、c1のほうが有意に高かった。3回目と4回目に有意な群間差はなかった。

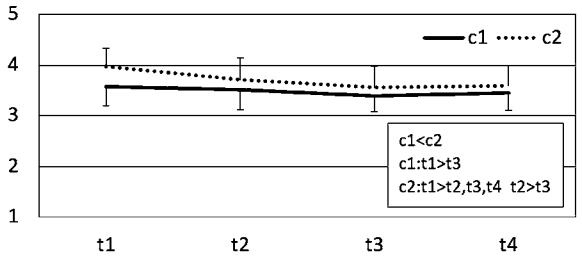

図2−1．返済規範意識の平均の変化

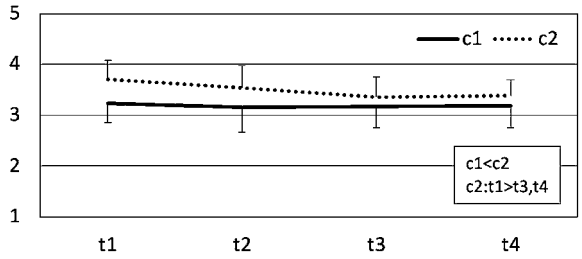

図2−2．自己犠牲規範意識の平均の変化

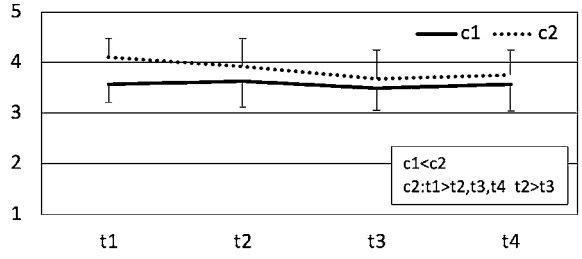

図2−3．弱者救済規範意識の平均の変化

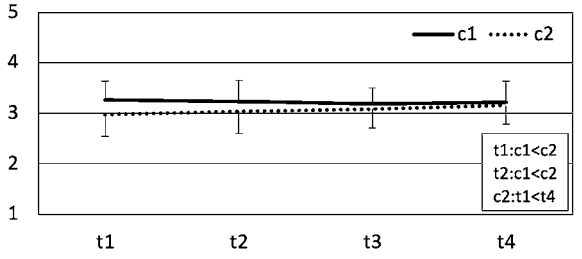

図2−4．交換規範意識の平均の変化

Ⅳ．考察

1．対象者の援助規範意識の特徴

本研究の対象者の特徴を明らかにすることを目的に、先行研究で示されている実習前に測定された得点と比較したところ、本調査の対象者は、返済規範意識と弱者救済規範意識が先行研究よりも高かった。自己犠牲規範意識と弱者救済規範意識は先行研究と同等であった。本調査の対象者の専門教育をうける前の援助規範意識の特徴として、他の分野で対人援助職の専門教育を受けている学生よりも援助規範が高く、自分より弱い誰かを助けたい思いや、互酬的な意向が強いことがわかる。この差が生じた要因としては、先行研究の対象者が看護学生という分野の違いよりも３年生であるという学年の違いがあるのではないだろうか。一般的に専門職の養成課程は学年進行にともない専門教育における学びが深化し、より実践的な内容へ進んでいく。このことから、先行研究の対象者の援助規範意識はすでに専門教育による一定の影響を受けているのではないかと考えられる。

次に、入学時の援助規範意識の４サブスケールの得点を用いてグループを抽出した結果、二つの群に分けられた。第１クラスタ（以下、c1）と第２クラスタ（以下、c２）では、c１がc２よりも返済規範意識、自己犠牲規範意識、弱者救済規範意識は低く、交換規範意識は高いという違いが示されており、ｃ２は援助規範意識が高い群、c1は低い群ともみえる。しかし、先行研究との比較から、必ずしも低いとはいえず、本調査対象者の中では援助規範意識が低いc1は、一定の専門教育を受けている学生の援助規範意識と同等であった。むしろ、c2は3つの援助規範意識が高く、自分に有利になる援助ならしようという「交換援助規範意識」が低い、愛他的行動に意欲的な群であるという特徴がみられた。

2．援助規範意識の在学中の変化

これらのクラスタごとに在学中の援助規範意識の変化を確認し、援助観の育成に専門教育と学外実習がどのような影響を与えているかを考察する。ｃ１では、返済規範意識が1回目より3回目のほうが低くなっているということ以外には、1回目から4回目までの調査を通して自己犠牲規範意識、弱者救済規範意識、交換規範意識の変化は確認されなかった。先に述べたように、入学時に専門教育を受けている

看護系の３年生と同等の援助規範意識を持っており、援助規範意識が安定しているグループといえる。

次に、援助規範意識の変化が顕著に確認されたｃ2について検討する。いずれの側面でも、在学中に援助規範がｃ1に近くなっていく。返済規範意識と弱者救済規範意識は１回目と２回目において有意な変化がみられている。２回目の調査時期は１年生の９月であり、まだ正課の学外実習は経験していないことから、ここでみられた変化は１年生前期に実施された座学の影響を受けているのではないかと考えられる。返済規範意識は、「以前、私を助けてくれた人には、特に親切にすべきである」というような項目から成っており、互酬的な要素を含んでいる[5)]。また弱者救済規範意識は、「しいたげられている人を、まず救うべきだ」などの項目から成り、自分より弱い立場、悪い立場、経済的に困っている人々に対するなど救済や分与を指示する規範に関する意識である[5)]。入学時は、保育者の援助は「お互いさま」「受けた恩には報いるべき」といった考えや援助対象となる子どもは自分よりも年下で弱い存在であると思っていたものが、先述の専門教育によってそうではないことを学び、援助規範意識に変化を及ぼしたのではないだろうか。さらに、幼稚園実習を５日間と保育所実習を10日間経験した後の３回目は２回目と比べ有意に低いという結果が確認されている。３回目で確認された変化は、学生にとって初めての学外実習であるというインパクトとともに、座学での学びで得た保育者の援助のイメージや子ども像が保育現場でよりリアルなものとして具象化され、援助規範意識の変化に影響を与えたのではないかと考える。

自己犠牲規範意識は、２回目では変化がみられず、３回目と４回目が１回目より有意に低いという結果だった。自己犠牲規範意識は、「人が困っているときには、自分がどんな状況にあろうとも助けるべきである」というよう項目から構成されており、自己犠牲を含む愛他的行動を指示する規範への意識を表している[5)]。入学時は、援助とは自分を犠牲にすることを厭わないものだという意識が、専門教育で保育者の専門性を学び、保育現場で実際に子どもとかかわり、保育者の援助を目の当たりにすることで、援助は自分を犠牲にしてまで行うものではなく、あくまで専門的な行為であるということを実感したのではないかと考える。

交換規範意識は、「人の好意には甘えてもよい」「どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない」という項目から成っており、援助に見返りを期待し、援助を相互交換的にとらえることについて聞いており[5)]、ｃ2の学生は２年間で高くなりｃ1と同程度になっている。このことは、入学時には愛他的な行動に意欲的で自分が有利になるような援助には消極的な傾向があった学生が、専門知識を身につけ、実習などで保育現場を経験することで、自分が他者から援助を受けていることに自覚的になり、相互に援助する関係を受け入れるようになったと解釈するとこができるのではないかと考えた。

以上のことから、保育者養成課程に入学してくる学生の中に、他者への援助に意欲的で自分のことを多少犠牲にしても援助することは望ましいことだという志をもっている学生がいることが明らかになった。入学後の専門教育で援助は必ずしも返済を伴わないことや弱者に対する一方的な援助行動は控えたほうがいい場面があることを学んでいた。さらに保育現場での実習で、専門職として自分を犠牲にしても援助することは控えたほうがいい場面があることや自分自身も援助を受ける存在であり援助は相互に行われるものであることを学び、専門職としての援助規範意識を身につけている様子が示された。

Ⅴ．まとめと今後の課題

本研究では、調査対象者を２群に分けることで、実習前後に援助規範意識が安定している群と変化する群を見出した。変化する群は、入学時の援助規範が概ね高く、自分に有利になるような援助をしようという意識は低い、正義感の強いタイプであった。学生たちは、２年間の養成課程で専門職としての援助規範を学び、実習を経験することで、安定している群の援助規範意識に近づいてくる傾向にあることが確認された。本研究の結果から、保育者養成の専門教育では、愛他的な行動に意欲的な学生に対して専門職としての判断ができるように諌めるような働きかけが必要な場面もあることが示された。

その一方で、実際に養成課程での専門教育や実習におけるどのような学びと経験が援助規範意識に影響を及ぼしたのかについては明確に示すことができなかった。今後は、それらについて調査・研究を通して明らかにし、その結果を専門教育における教授内容や実習指導に活かしていくことが課題と考える。

引用文献

1）阿南寿美子･命婦恭子･篠木賢一･笠修彰･末嵜雅美（2021）保育者養成校における保育者としての資質に関する調査～変数間の関連性の分析～ 西南女学院大学紀要 Vol.25, pp.113-122.

2）木村匡登・松崎優・安德弥生・木村倫子・片山敏克（2012）福祉専門職における対人援助観教育に関する考察(その 1) 福岡医療福祉大学紀要第 9 号 , pp.153-158.

3）厚生労働省編(2018) 保育所保育指針解説 , フレーベル館, p.17.

4）茂井万里絵・若尾義徳（2011-2012）特別なニーズのある児･者との関わりによる援助規範意識の変容 －保育実習Ⅰ（施設）の事前事後の調査を通して－ 浜松学院大学研究論集 8, pp.91-97.

5）箱井英寿・高木修（1987）援助期は錦の性別、年代、および、世代間の比較 社会心理学研究 3（1）, pp.39-47.

6）大西良・辻丸秀策・藤島法仁・占部尊士・大岡由佳・末崎政晃・福山裕夫（2008）精神保健福祉援助実習における実習生の援助観の遷移～援助規範意識と援助イメージの測定から～ , 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要第 15 巻第 1 号 , pp.47-55.

7）柴田和恵・高橋ゆかり・鹿村眞理子（2007）看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連 - 臨地実習前後の比較 -, 天使大学紀要 7, pp.85-92.

8）荒木剛・通山久仁子（2010）学生の対人援助観にみる現場体験の意義－『基礎実習』履修学生のインタビュー調査を基に－ , 西南女学院大学紀要 Vol.14, pp.17-27.

A Longitudinal Study of Views of Assistance for Students of Childcare Worker Training Courses

Naoaki Kasa *, Yasuko Meifu *, Sumiko Anami *,
Kenichi Shinoki *, Masami Suezaki *

＜Abstract＞

It is important to foster a professional view of helping in the nursery teacher training courses so that students can develop the qualities required of childcare workers . This study examined how professional education and off-campus training influence the development of students' views of helping and examined how professional education and off-campus training influence the development of their view of helping. For students who entered in 2016, 2017, and 2018, we conducted a questionnaire survey four times during the two years that the target students were enrolled and measured their assistance normative awareness. The results of the questionnaire survey allowed us to divide the survey participants into two groups according to the characteristics of the helping norms immediately after their enrollment. One group of students whose awareness of helping norm remained stable and another group whose awareness of helping norm changed before and after the off-campus training were found. The changing group was characterized by a higher awareness of norms of restitution, norms of self-,sacrifice, and norms of aiding the weak at the time of matriculation than the stable group. In addition, exchange norm consciousness was characterized as low. Furthermore, the results showed that the changing group tended to approach the stable group's awareness of helping norms as they learned professional helping norms during their two-year training program and experienced practical training.

Keywords: The childcare worker training course, qualities of childcare workers,
views of helping, helping norms, longitudinal research

* Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College